

十分な注意が必要である。

7. 上腕骨近位部骨折後に発症した肘関節強直の1例

落合信靖, 西須 孝, 藤田耕司
和田佑一, 後藤澄雄 (千大)
林 宗寛 (国保成東)
森石丈二 (松戸整形外科)

今回、上腕骨近位部骨折後に発症した肘関節強直の一例を経験したので硬組織学的考察を加えて報告した。症例は、60歳、女性、上腕骨近位部骨折後のゼロポジション牽引による拘縮後の可動域訓練により肘関節の強直に至った。強直肢位は、40度屈曲位であった。津下法にて架橋部の骨を摘出し、術後2カ月で可動域は40度から130度、異所性石灰化の再発は認められていない。

肘関節周囲の石灰化による関節拘縮や強直に対する手術では、術後の石灰化再発が危惧されるため、手術時期をどのように決めるかが問題となる。硬組織学的検討からBone Scanは手術時期を決める手段として有用ではなかった。

8. てんかん発作に起因した反復性肩関節脱臼の3症例

岸田俊二, 西須 孝, 藤田耕司
和田佑一 (千大)
黒田重史, 森石丈二
(松戸整形外科)
今井克己, 六角智之 (千葉市立)

てんかん発作に起因した反復性肩関節脱臼の3症例を経験した。入院時所見では、anterior apprehension test陽性であり、loose shoulderの所見はなかった。画像所見上、大きなHill-Sachs lesion, Bony Bankart lesionが特徴であった。骨欠損範囲が大きく、てんかんによる再脱臼が予想されたので再脱臼率の低いBristow変法にて手術を行い、再脱臼を認めていない。脱臼の機序として、てんかん発作にともなう筋肉の収縮により強大な求心力が働いていた物と考えられた。

9. 伸展障害を伴ったHoffa病の一治検例

西尾 豊, 藤田耕司, 高橋謙二
中川晃一, 伊嶋正弘, 佐粧孝久
和田佑一 (千大)

10. 外側円板状半月板を伴った大腿骨外側顆離断性骨軟骨炎の1症例

永嶋良太, 和田佑一, 佐粧孝久
伊嶋正弘, 中川晃一, 栃木祐樹
藤田耕司, 高橋謙二 (千大)

膝離断性骨軟骨炎(以下OCD)は大腿骨内側顆に多いとされているが、今回我々は外側円板状半月板を伴い、5.0×2.7cmと巨大な遊離体を伴った膝OCDを経験した。この症例に対してFIXSORB径4mm cancellous screwを用い遊離体を整復固定し、良好な骨癒合を得た。OCDの発生機序、外側型OCDと外側円板状半月板との因果関係について、若干の文献的考察をした。

11. 繰り返し生じた特発性膝関節血症の2例

鴨田博人, 藤田耕司, 高橋謙二
栃木祐樹, 中川晃一, 伊嶋正弘
藤井康成, 佐粧孝久, 和田佑一
(千大)

症例はともに膝関節痛を主訴とし、関節内血症を数度繰り返した女性でありX線上下側型OAを呈していた。MRI上では外側半月板損傷が認められた。鏡視下において損傷部半月板切除を行い、またlateral inferior genicular arteryからの出血を確認したためこれを止血した。その後再発を見ていない。以上より、本症例は外側半月板損傷による上記血管の虚弱化が原因でありレーザーや電気メスによる止血が有用であると考えられた。

12. Ilioinguinal approachにより整復し得た寛骨臼骨折の1例

宮坂 健, 原田義忠, 阿部 功
老沼和弘, 神川康也, 赤松利信
(千大)
中島文毅 (県立東金)

症例は19歳、男性。交通事故にて受傷。左寛骨臼両柱骨折と診断された。受傷後三週にilioinguinal approachを併用した観血的整復固定術を行った。術後25週、左股関節の可動域制限、疼痛なく、独歩可能である。寛骨臼骨折の合併症である変股症は臼蓋荷重部の整復位の程度により合併率が大きく左右される。本症例はこの荷重部の整復が達成できたことにより、良好な臨床成績が得られたものと考えられた。

13. 遺伝子銃装置による骨軟骨組織への遺伝子導入の試み

中川晃一, 和田佑一 (千大)
増田公男 (国療下志津)
増田理亜子 (千大院)